

# 北の零年

2005(平成17)年1月16日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★★



監督＝行定勲／出演＝吉永小百合／渡辺謙／豊川悦司／柳葉敏郎／石原さとみ／石田ゆり子  
／香川照之／石橋蓮司（東映配給／2005年日本映画／168分）

## 第4章

## SHOW・HEY お得意の社会派映画

……行定勲監督がメガホンをとり、製作費15億円をかけた吉永小百合出演111本目の超大作！ 時代設定も面白くテーマも壮大なもので、女性の強さ・たくましさ吉永小百合が大熱演！ 戦後60年の節目となる今年、60歳の還暦を迎えた吉永小百合の体あたり演技は見モノだ！ しかしその反面、男たちは……？ 渡辺謙をはじめ、ちょっとだらしなさすぎるのでは……？ さらに行定勲監督は、昨年大ヒットさせた『セカチュー』では若手俳優をうまく使ったが、このオールスターキャストには少し遠慮気味……？ この映画はあまりにオーソドックスすぎるのでは……？

### 俺は根っからのサユリスト！

この映画は吉永小百合111本目の出演作品として大宣伝され、パンフレットには吉永小百合のDVDコレクションや写真集の広告まで載っている。その写真を見ると、当然ながら私が中学・高校時代にスクリーンで見た姿や、『映画の友』『スクリーン』という2大映画雑誌でいつも観ていた姿と全く同じ……。そして『寒い朝』のレコードジャケットの写真も……。日活での石原裕次郎や小林旭との共演作や浜田光夫との青春コンビ作品については、その8～9割を私は観ているはず。中でも、『愛と死をみつめて』（64年）は、昨年大ヒットした『セカチュー』や、あの韓国ドラマ『冬ソナ』にも決して負けない、涙、涙また涙の純愛モノ！

### 男性映画スターたちの今は？

映画界が斜陽産業となった1970年以降、男性「映画スター」たちは俳優として

の生き残りとのロマンスを賭けて、石原プロ・三船プロ・勝プロ等を設立し、それぞれにさまざまな道を模索した。しかし既に石原裕次郎・三船敏郎・勝新太郎は亡くなってしまったうえ、多くの男性ベテラン俳優は「映画スター」としての輝きを失っている。石原プロの跡目を継いだ(?)渡哲也は、つい最近公開された『レディ・ジョーカー』では渋い役柄をしっかりと演じ、さらに2005年のNHK大河ドラマ『義経』では平清盛というおいしい役(?)をもらっているが、病気のせいもあってか、60ウン歳にして少し老人の雰囲気……。今も元気で、「万年青年」のオーラを発揮しているのは芸能生活50年を迎えた小林旭と話題作への出演を続けている高倉健、そして今でも元気にエレキをかきながら、「僕は君といるときが1番幸せなんだ……」と歌っている加山雄三くらいか……?

## 女優、吉永小百合の生きざまとそのたくましさ

しかし、女優、吉永小百合はすごい! 自ら事業に手を出すことはせず、結婚はしたものの子供はつくらず(できず?)、斜陽産業となった1970年代の映画界でも『男はつらいよ 柴又慕情』(72年)でのマドンナ役はもちろん、『青春の門』(75年)での伊吹タエ役等を印象的に演じ、さらに1980年以降も、高倉健と共演した『動乱』(80年)、渡哲也と共演した『時雨の記』(98年)など、自分のペースを守って数年毎の大作に出演し続けている。そして、21世紀に入ってから、『千年の恋 ひかる源氏物語』(01年)に続く今回の超大作の主役だ! そのしなやかな生きざまに感心するとともに、そのたくましさにホレボレ……。

## 女たちのたくましさ、だらしない男たち

『風と共に去りぬ』(39年)の主人公であるスカーレット・オハラをはじめとして、大きく時代が動く中たくましく生き抜いていくのは女、と相場は決まっている……。この映画でも数々の逆境にもめげず、じっとそれを耐え忍び、結果的にたくましく生き抜いていくのは小松原志乃(吉永小百合)。まさに吉永小百合の111作目にふさわしい、吉永小百合のために用意されたような映画となっている。

この志乃の他にも、志乃が妹のように可愛がっていた馬宮加代(石田ゆり子)は、志乃とは全く違う方向へ向かったが、その生き方はやはりたくましい。そし

て成長した志乃の娘、小松原多恵（石原さとみ）も立派なもの。

しかしこれらの女たちに比べると、男たちはどうも……？ だらしのない男たちの揃い踏みとなっていると思うのは、私だけだろうか？ 吉永小百合の引き立て役が必要だということを考慮しても、ちょっと情けなすぎるのでは……？ 以下、男たち1人1人について少しずつ苦言を呈しておきたい。

## 🎬男たちへの苦言 その1 渡辺謙

『ラストサムライ』（03年）での渡辺謙は実にカッコよかった。この映画でも吉永小百合との本格的共演と聞いて、私は大いに期待していた。渡辺謙扮する小松原英明は、稲田家の先遣隊として先に北海道の静内に入り、先遣隊のトップである家老の堀部賀兵衛（石橋蓮司）をサポートする重要なお役目で、いわば先遣隊のナンバー2。映画前半の3分の1では、志乃たちの到着を迎え入れた英明が、殿のためのお屋敷の建設や荒地の開墾に泥まみれ、汗まみれとなって努力をしている姿が描かれる。殿様に対して、「新しい土地を緑豊かな土地にしてみせる！」と約束したことを実現すべく懸命の努力を続ける姿や、志乃に対して「信じていれば、その夢はいつかきっとまことになる」と信念をもって語る姿は、渡辺謙お似合いの芝居で「ちょっと臭いナ」と思いつつ、やはりカッコいいもの。

そして英明は、寒冷の地にも実る稲を探すべく、開拓団（？）や妻子の期待を一身に背負って札幌に向かったが、そこで出番は突然切れてしまった。そのため映画の中盤では、英明の登場場面は全くなし。「仲間を見捨てた！」と非難されながら、志乃はあくまで夫を信じていたが……？ そして私も、さてどうなるのだろう、いつ帰ってくるのだろうと思いつつスクリーンを覗いていたが……？

そして映画の残り3分の1。ここでの渡辺謙は最悪！ その姓も小松原から三原へと変わり、姿・形も立派な県の高級官僚となって再登場した渡辺謙は、志乃に対して①再婚したことの弁解と②役人となったことの弁解ばかり！ こりゃいくら何でも、カッコ悪すぎるのでは……？

## 🎬男たちへの苦言 その2 柳葉敏郎

藩や殿様から見捨てられ北海道の荒地で生きていくのは至難のワザ。その最大

の問題は食糧不足。「武士は食わねど高楊枝」といかないことは当然で、自らマゲを切った武士たちに農民と同じ生活が強いられた。そしてそこでは、武術や学問の価値は失われ、ずるくとも生きる術に長けた者が力を握ってくることになる。その前者の代表が英明の友人の馬宮伝蔵（柳葉敏郎）であり、後者の代表が後述する薬売りの持田倉蔵（香川照之）だ。伝蔵の一人息子の雄之介は小松原の一人娘である多恵の許嫁だったが、静内への移住後病に倒れてしまい、伝蔵は遂にこの最愛の息子を失うことに。そのうえ藩から見捨てられ、こんな寒冷の地では武士としての能力や誇りは何の役にも立たないうえ、いくら働いても食うこともできない。そんな中、力を増していく倉蔵とのトラブルで刀を抜いたものの、伝蔵のそんな理屈が通るはずもなし。妻の加代や家老の堀部まで倉蔵に頭を下げて食料品を懇願する中、伝蔵の生きていく途はどこにもなかった。

5年後、志乃がこの伝蔵を見たのは、酒に溺れ、村役場の側で馬に飼葉をやって細々と生きている姿。それは何とも情けない、武士の末路としかいえない姿だったが……。

### 男たちへの苦言 その3 香川照之

厳しい雪の中、生活に困窮している開拓団に食糧などを支援することによって、次第に力を蓄えていった元薬売りの持田倉蔵（香川照之）は、何と武士の妻として夫の帰りをひたすら待っている志乃の肉体に欲望の目を向けることに……。そしてこれをアシリカ（豊川悦司）に邪魔されると、今度は馬宮伝蔵の妻、加代（石田ゆり子）の肉体に対して魔の手を伸ばすことに……。倉蔵のイヤらしさは、芸達者な香川照之の独壇場だが、観ていてあまり気分のいいものではない。志乃にははねつけられたものの、加代はある意味で利口で現実派（？）だから、倉蔵の要求を受け入れた。しかし倉蔵に抱かれることによって生活の安定を得ようとした加代を一方的に非難することは誰もできないはず。倉蔵との密通（？）をなじる夫の伝蔵に対して、加代は「妻子も養えないクセに武士の誇りとは何か！」と逆ギレしたが、それも説得力がある。そして遂に加代は、倉蔵と結婚して子供までもうけることに……。そんなこんなで開拓団への生活援助の中で力をつけていった倉蔵は、今や開拓村のいわば村長にまで出世していた。

## 男たちへの苦言 その4 石橋蓮司

先遣隊のトップは稲田家・家老の堀部賀兵衛（石橋蓮司）。彼はそれなりのリーダーシップを発揮していたが、藩から見捨てられた後はその統率力も弱まり、なす術もなし。そして2度目の冬を迎える頃になると、食料品をもらうために倉蔵に対して頭を下げるありさま。そして5年後、開拓村の村長となっている倉蔵が、馬を軍用に徴用するとの命令を伝えるために志乃を呼びつけた時には、村役場でお茶くみとして村長にかしづいている始末。倉蔵はその力関係の変化を志乃に誇示するため、みじめな元家老の姿をわざと見せつけていたのだった。人間落ちぶれるとここまでなるのか、と思わず暗い気持ちになってしまったが……。

## 男たちへの苦言 その5 豊川悦司

渡辺謙が「不在」となる映画の中盤の3分の1で、吉永小百合のお相手をつとめる（？）のがアイヌのアシリカの役を演ずる豊川悦司。彼はいつも外部からこの開拓団、とりわけ志乃と多恵の母娘を温かく見守り、その手助けをしていた。自分の妻と娘を失ったアシリカにとって、いつしかその気持が志乃への愛情に変わっていったのは当然。そしてまた、いつまでも帰ってこない夫を待ち続けている志乃にも、そのアシリカの気持はわかっていたはず。しかしこの2人は……？

アシリカはかなりおいしい役（？）で、映画の後半、何とも情けなくなってしまう渡辺謙よりよっぽどカッコいい。しかしこのアシリカも最後はどうも……？

最後のハイライトシーンでアシリカは、県の横暴に対抗して志乃の馬を解放した。そしてその後は、突然大小2本の刀を腰にさして登場し……？ そのてん末をこれ以上書くわけにはいかないが、これもカッコいいのか悪いのか……？

## なぜみんな同じ行動を？

農耕民族であり単一民族である日本人は、「和をもって尊しとなす」という聖徳太子の思想が身にしみついており、「説得と納得」のもとに全員一致で事をなすことを得意としている。これが、狩猟民族であり多民族国家であるヨーロッパやアメリカとは大きく異なる点だ。この特性は、国民全体が一致していい方向に

進めば全体として大きな力を発揮するが、方向を誤るとヤバイことに……。それは明治国家から軍国主義ニッポンに変質していった過程を見れば明らかだ。

この映画を観て私が異様に思えるのは、藩と殿様から見捨てられた開拓団の武士たちは、小松原英明が「もはや君主はいらぬ！俺はこの地に踏みとどまる！」と宣言して、自らの小刀でそのチョンマゲを切りすてしまうと、我も我もとそれに従っていくこと！たしかに小松原のこの決断は1つの選択だが、冷静に考えれば当然他の選択肢もあるはず。藩が廃止され、「廃藩置県」になったのだから、もはや北海道の地にこだわる必要はなく、故郷の淡路に帰るという道だ。帰った後どうやって生計をたてていくのかという不安はあるだろうが、北海道よりも、生まれ育った淡路の方が生きやすいことは誰にでもわかる理屈。ところがこの映画では誰もそういう主張をせず、盲目的に(?)小松原英明に従っていく。

また私がそれ以上に気に入らないのは、まげを切った武士たちはみんな自らの意思で小松原の選択に従ったはずであり、また開拓団の総意によって小松原を札幌に派遣したはずなのに、その小松原がなかなか帰ってこないとなると、その妻たちが「小松原様は私たちを見捨てた」と文句を言い始め、その攻撃の矛先を残った志乃に向けること。このような行動は、まさに個人として自立していないこと、そして民主主義が成熟していないことの端的な表れだと私は思うのだが……。

## ハイライトシーンはちょっと非現実的

この映画のハイライトは、今や県の高級官僚となった三原英明が軍事用として馬20頭を徴用するために、志乃の牧場を訪れるシーン。徴用の呼びかけを無視されたため兵隊に鉄砲を構えさせて威嚇する英明に対して、最初に鉄をもって敢然と立ち上がったのは、元家老の堀部賀兵衛。そして農民たちがこれに続いた後、うちひしがれていたあの馬宮伝蔵も。そしてさらに加代も。その他、持田倉蔵を除く開拓団たち一行全員が、「馬を徴用されてはこの村はもたなくなる！」という覚悟のもとに一斉蜂起(?)する。これに対する三原英明の決断は？

「県の権力」と「農民たちの反乱」という緊張感ある対峙のシーンを一挙に「解決」したのは、アシリカ。アシリカは馬屋から20頭の馬すべてを解放するこ

とによって、その徴用を不可能にさせてしまったのだ。今や「権力の権化」となった感のある三原英明に対して、それまでしょぼくれていた伝蔵や加代や堀部が敢然と立ち上がることになるのだが、これはかなり不自然……。そして映画は、その後さらに吉永小百合用のとっておきのラストシーンも……。

## 戦後60年と吉永小百合

吉永小百合が生まれたのは1945年3月13日。つまり終戦の年だ。したがって、戦後60年の節目となる今年2005年は彼女にとって還暦を迎える記念すべき年。吉永小百合の「戦争と平和」についての「思い」は、ボランティアで長い間続いている広島での「原爆詩の朗読」活動に端的に表れている。2002年には、彼女の16年間にわたるこの活動が評価され、「オメガ・アワード」を受賞している。戦後60年の今年、私は彼女にはもっと大きな声で社会的な発言を展開してもらいたいと思っているのだが……。

## 行定勲監督は気の遣いすぎ……？

この映画の製作費は15億円と近時の日本映画にしては巨額の投資。そんな超大作の監督に若手の行定勲が抜擢されたのは、去年の『世界の中心で、愛をさけぶ』の大ヒットによるもの。『セカチュー』はたしかに良かったが、いい映画になったのは柴咲コウや大沢たかおという若い俳優を行定監督がうまくリードし、その新鮮な感覚をみずみずしく表現したからだ。しかしこの映画では、吉永小百合、渡辺謙、豊川悦司をはじめ、そうそうたる実績をもったオールスターの登場。その上、吉永小百合111本目の主演作とうたった映画だから、吉永小百合中心の映画になってしまうことは避けられない。そんな、「あれやこれや」で行定監督はちょっと気を遣いすぎたのでは……？

もっとも映画の出来には脚本の出来も大きな影響を与えるはずだから、この映画では那須真知子氏による脚本の出来ももうひとつなのかも……。2時間48分という長い映画を丁寧につけていることはわかるが、あまりにも吉永小百合讃歌調に作りすぎているのでは……？

2005(平成17)年1月17日記